

# テンニエスのゲマインシャフト論における

## 記憶と本質意志

西澤 真則\*

### 【要旨】

フェルディナント・テンニエス（1855-1936）は、主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト：純粹社会学の基本概念』（1887）において、有機的実在的な本質意志と機械的観念的な選択意志のあり方に応じて区別される、社会集団の二つの類型——伝統社会（＝ゲマインシャフト）と近代資本主義社会（＝ゲゼルシャフト）を構想した。テンニエスの提唱した意志論と類型論は、19世紀末に興隆する社会学の基礎理論、ならびに社会心理学の諸領域に多大な影響を及ぼした。しかしその反面、今日に至るまで、テンニエスには、保守反動的、封建的、浪漫主義的という否定的な評価が与えられてきた。そのようなテンニエス像は、社会形態論の枠内でゲマインシャフトとゲゼルシャフトの類型が検討され、主著の理論的基盤である意志論との関連から統一的に評価されることのなかった学説史的背景から生みだされた。

従来のテンニエス解釈は、意志を行為を引き起こす原因と解してきた。この傾向の下で、やがて、意志は未来の相の下で、個々の行為を実現する力（＝選択意志）と見なされてゆく。もはや、本質意志と選択意志との区分は混同され、その上、意志論から類型論を評価するための手がかりさえ失われることになった。このテンニエスの学説史の特徴的な現象を把握する際、従来の「記憶」に対する評価を追跡することが有効である。従来のテンニエス研究では、「記憶」は、行為の実現のための手段と解され、選択意志の相の下に置かれてきた。ところが、先行研究における「記憶」の姿と、テンニエスの説く本質意志に特有な「記憶」との間には明らかな隔たりが見られる。

テンニエスによれば、「記憶」は、印象を再生する能力であるとともに、「記憶」を媒介として形成される習慣の再現と、それに対する意味づけを通して、失われた出来事を共有する基盤をもたらすと考えられている。例えば、宗教的祭祀や芸術作品は、過去の共同存在において形成され、現在を生きるわれわれを支える記憶の網の目のなかに保持されるとされる。それゆえ、テンニエスの述べる「記憶」は、同一空間に閉鎖的な共同関係ではなく、特定の時間と空間を超えた記憶の共同性を開示する可能性を有する鍵概念である。この本質意志特有の活動である「記憶」は、共感と同情とに支えをもつ精神的ゲマインシャフトの理論的基盤をなす。記憶の共同性は、欲求実現の最大化と最適化を追い求める思考行動様式が、人と人との共生関係を崩壊に至らしめるというゲゼルシャフトの問題点を、

---

\* 関西学院大学大学院総合政策研究科研究員（holzwege@kwansei.ac.jp）

われわれに自覚せしめる契機を有する。

以上、本稿は、記憶論の視角から意志論を整合的に解釈するとともに、その枠組みから社会形態論を評価する手がかりを示すことを目指す。このように再構成される記憶の共同性こそ、テンニェスの共同体論の構想を統一的に解釈するための重要な手がかりの一つである。

キーワード：ゲマインシャフト、ゲゼルシャフト、本質意志、選択意志、記憶、実在性、了解

## 1. 問題の究明：記憶の作用による本質意志のあらわれとしての実在性

本稿は、テンニェスの主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』(1887)<sup>1</sup>における、「記憶」を媒介として成立する「本質意志」の再構成を目指す。テンニェスによれば、記憶は、共同存在として間柄を生きる人間に、人間らしさをもたらす——たとえば遠く離れた故郷を懐かしみ、死者を崇敬し、共に生きた証を語り、またそうした過去の出来事を永続的な芸術表現にまで高めるのは記憶に負うところが大きい<sup>2</sup>。こうした記憶の力は、死者と、今を生きる我々と、そして生まれ出る者との間を結びつける人間特有の共同的基盤をもたらす<sup>3</sup>。

共同存在の脊髄とも喩えられる記憶を、テンニェスは「本質意志に特有」<sup>4</sup>な知性と言い換えている。

本質意志は、知性を含む意志とされる<sup>5</sup>。そのように内に含まれる知性の側からみるならば、本質意志は過去の相に属する出来事を、記憶を通して現在の相に再現する知的活動の一種と考えられる。こうした知性の一形態としての記憶の活動を通して、本質意志は、過去における理解をレファレンスとした実在性を形成する<sup>6</sup>。たとえば、日々の糧を集めることの労苦が表現された竈<sup>7</sup>、我々の

---

<sup>1</sup> テンニェス原典からの引用は、Ferdinand Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*. (1887) Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1979. による。原典を引用参照する際は G.u.G.と略記する。邦訳からの引用は、テンニェス 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト：純粹社会学の基本概念（上）、（下）』 杉之原寿一訳、東京、岩波書店、1979年による。邦訳を引用参照する際は、『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）、（下）』と略記する。引用文中の（…）は中略を、〔 〕は筆者による補足を表す。

<sup>2</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（下）』 p. 158 (G.u.G. S. 187).

<sup>3</sup> *ibid.* p. 158 (G.u.G. S.187).

<sup>4</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』 pp. 180f (G.u.G. S.82).

<sup>5</sup> *ibid.* p. 165 (G.u.G. S.73).

<sup>6</sup> *ibid.* pp. 164f (G.u.G. S.73).

<sup>7</sup> 「かまどとその生き生きとした火は、いわば家そのものの核心であり本質である。それは、男も女も、老いも若きも、主人も僕も、すべての者が食事をとるためにその周囲に集まる場所である。（…）〔かまど〕は、世代の交替にかかわらず持続する家の生命力としての意味を有〔する〕」 *ibid.* p. 72 (G.u.G. S.24).

自己保存のために供された犠牲への祈りを頌ち合う食卓<sup>8</sup>、習慣の積み上げと自然な気立てのなかに形成される習俗や掟<sup>9</sup>、共に活きた証としての都市における芸術、物語、そして神話といったゲマインシャフトの様々な象徴は、それらの形態が記憶という領野において保持され、そして人々の呼びかけに応じて現前する、本質意志のあらわれである<sup>10</sup>。こうしたゲマインシャフトの記憶への関わりとそのあらわれこそ、実在的と呼ばれ、本質意志的活動の核心をなす。

実在的であるとは、部分と部分との「単なる結合」ではなく、部分間の結びつきを繋ぎ止める全体の存在を前提とし、そこにおいて部分と部分とが相互に織りなす有機的連関のことである<sup>11</sup>。テンニェスは、自己を認識する我々自身がそうした実在的な存在として知られていると言う<sup>12</sup>。それというのも、我々の身体を構成する個々の器官は、生の営みには必要ではあるが、それら諸器官を集めたとしても、そこから己を成立せしめる己自身の全体への認識に至ることはないからである<sup>13</sup>。それは、目的に応じて貯蔵庫から取り出されてくる情

<sup>8</sup> 「[食卓では、] 死者は、あたかもまだ強大な力を有し、家族の長を保護しながら支配しているかのように、見えざる霊としてあがめられている。」 *ibid.* p. 51 (G.u.G. SS.12f), 「家族の構成員は、統一的な労働にたずさわるためにまず分離するが、享樂の必然的な分配にあずかるために、食卓においてふたたび結びつく。」 *ibid.* p. 72 (G.u.G. S.24).

<sup>9</sup> 「[習俗や掟は] 習熟・因襲・伝承によって容易なものとなり、自然的なもの——それ自体了解的なもの——となり、したがって、場合によっては必然的なものとみなされるようになる」 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (下)』 p. 155 (G.u.G. S.185).

<sup>10</sup> 知性と記憶との関係については、以下を参照。Ferdinand Tönnies: *Kritik der öffentlichen Meinung. (1922) in: Ferdinand Tönnies Gesamtausgabe*, hg. v. Alexander Deichsel, Rolf Fechner und Rainer Waßner, 14 Bde., Berlin, New York: de Gruyter, 2002, SS. 34f.

次の引用は、ゲマインシャフト的宗教と記憶の関係に触れるものである。「宗教は、そのもっとも発展せる段階においては至る処で、家族生活の出来事、すなわち結婚・子供の誕生の喜び・老人の尊敬・死者に対する哀悼の情を神聖化することによって、人間の気や良心にあらゆる固有の作用を及ぼすのである。(…) 宗教的自治共同体という言葉によって特に描きだされるものは、それ自体一つの家族とみなされ、共同の祭祀と祭壇によって血を同じくするという記憶を保持している一民族全体の根源的統一性と同一性である。」

『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (下)』 p. 184 (G.u.G. S.201).

また、芸術と記憶との関係については、以下を参照した。「都市の城壁や塔や城門をつくり、市役所や教会を建てるための建築術として、——また、このような家々の内外を飾ったり、神や偉人についての思い出を肖像によって保存し育成したり、一般に尊きもの・永遠なるものを身近にもたらしたりするための彫刻や絵画として存在するのである。(…) 芸術と宗教との緊密な結びつきは、その基礎を家の生活に有している。あらゆる原初的な祭祀は、家と結びついている。したがってそれは、かまどと祭壇がもともと一つでありその起源を等しくしている場合に、家の祭祀としてもっとも力強い形態を示す。祭祀それ自体が一つの芸術である。死者や崇拜する者に対してなされることは、敬虔な真面目な気持ちをもって、このような気持ちを保存し喚起するのに適した慎重な厳格な方法で行われる。」 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (上)』 pp. 86f (G.u.G. SS.31f).

さらに両者の関係は、以下のように端的に表現される。「芸術。これは記憶にもとづく。すなわち、受けた教えや銘記された規則やその人自身の考えの記憶にもとづいている。」

『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (下)』 p. 209 (G.u.G. S.216).

<sup>11</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (上)』 p. 34 (G.u.G. S.3), *ibid.* pp.37ff (G.u.G. SS.4ff), 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (下)』 p. 84 (G.u.G. S.147).

<sup>12</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (上)』 p.39 (G.u.G. SS.5f).

<sup>13</sup> *ibid.* p.39 (G.u.G. S.5).

報の断片が全体を構成する<sup>14</sup> のではなく、「遠く離れていても、近くにいるという」「ゲマインシャフト的な活動の感じと想像」を伴う一つの全体へ係留された記憶である<sup>15</sup>。まさにテンニエスの語る実在性は、長い時の堆積のなかで生の営みを共にする縦横の広がりとしての記憶であり、そうした知性が過去の出来事を現在へと再現することであらわされる一体性を意味する。

この精神的一体性は、人がこの世に生まれ落ちるときには既に存在し、またこの世界を離れたとしても果てしなく存続する記憶の網の目である。知性を含む本質意志という意志論の定義における、意志への知性の従属的な位置づけに込められた意味とは、本質的知性が全体との関わりを恣意に任せて選択し実現する、選択的知性から遠いところにあるということである。それゆえ、ゲマインシャフトの最高次の精神的あらわれを記憶にみるテンニエスの本質意志論の構成において、知性は意志と並び、極めて重要な位置にあるといえる。

テンニエスは、記憶の網の目としての実在性をゲマインシャフトの同心円的構成に沿いながら重層的に描ききる。その同心円的構造は、血縁と空間と精神とにより構成される。すなわち、喜怒哀楽、生ならびに死にまつわる労苦の一切を共にする親密圏の相（血のゲマインシャフト）、またそうした血縁の条件と隣り合いながらも、了解の共有と継承との時間的空間的な拡張のなかにあらわれる共同体の相（空間のゲマインシャフト）、そして、人と人、人と自然の織りなす精神的アウラとして、我々の周囲を取りまく歴史文化的、芸術的営み、自然法的掟という、長い時間的堆積のなかに形成される普遍的共同性の相（精神のゲマインシャフト）によるゲマインシャフトの段階的構造である。しかしそうした段階的ともいえる発展構造のなかで、人間にも共通する生物的存在の拠り所である生態系の原理や、局所的空間における慣れ親しみの感情のみから精

---

<sup>14</sup> 主著『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』における記憶への言及は、習慣に刻み込まれ、自動的に発動される行為というイギリス経験論の流れをくむ一連の引用群と、既に形成された文化宗教的理解を継承する形而上学的側面との二方向に分かれて散見される。筆者は、実在性と本質意志と、また本質意志の表現を担う記憶との連関のなかにテンニエスの記憶論を見ることで、その連関のなかでテンニエスは記憶に関して一貫した見方をしていると考える——習慣と文化宗教的な精神的営みとの相互的關係を媒介する記憶は、経験論と合理論との調停の表現である。その調停は、テンニエスの学問的関心と、置かれていた時代状況とも密接に関わるものであるが、従来、テンニエスの記憶に関する言及は、言葉尻を逐次捉えるような仕方ではしか研究されていない。そのような従来へのテンニエス研究の一例として、吉田浩のテンニエス論を挙げる。

吉田は、精神のゲマインシャフトの意志の生命形式である記憶を、蓄積情報を呼び出す作用と同じ意味で捉えている。「記憶は、経験と模倣からなる学習によって獲得された知識が頭脳のなかに保持されることだが、記憶の真の宝は、何が正しく、何が善であるかを知ることだといわれる。記憶という意志形態によってテンニエスのいたかったことは、人間が様々な状況に直面したとき、いかに行動すべきかをその都度一から考えるのではなく、記憶のなかに蓄えられている知識を基準にして、適切かつ敏速に判断するということであり、それこそが人間に特有の態度だということであろう。」吉田浩 『フェルディナンド・テンニエス：ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』 東京、東信堂、2003年、p. 80。

<sup>15</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』 p.51 (G.u.G. S.13).

神のゲマインシャフトの統一性は説明されうるものではない。むしろ生物学的自然的共同存在は、時空間の制約を超えた了解の網の目が、記憶という知性の一環に支えられることで、人間の生物学的側面、共同の生活面、精神的側面といった生の多様な側面の一つの側面としての語りの構造のなかで成立する。そのような生物学的側面から人間特有の記憶的想起や、記憶にもとづく語りの営みは生成することはないからである。それゆえ、人間の生物学的存在は、ゲマインシャフトの同心円的構造のなかに関与される。すなわちその同心円的構造の中心軸は、相互の信頼に満ちた家族精神の直接的形態、喜びや悲しみに対する共同の参与のなかで相互の結びつきを確かなものとする空間的共同体、さらには祝祭と祭祀のもとで個別的な喜びと悲しみとを普遍的なものへ高め、それを頌ち合う精神的共同性の、いずれの相においても思い出すことにより再現される記憶の出来事が実在性の一角を占める点から説明されうる。テンニエスの語る実在性とは、過ぎ去りし過去のなかで、またみずからも過ぎ去りしものとして、思い出すことへと託された「魂の根源的統一と調和」のことである。<sup>16</sup> そうであるならば、本質意志と記憶と実在性とは、同じ一つの地平のなかで語られるべきではないだろうか。

テンニエスのゲマインシャフト論は、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトという人間の集団の類型を呈示したことで、一九世紀末の社会学の方法論に多大な影響を及ぼしたと考えられてきた<sup>17</sup>。しかし二つの類型に対する評価は、社会学としてのテンニエス研究が、組織論や体制論としての経験的社会学の領域に足踏みし続けることで、その裏側にある意志論を志向することはなかった。そうしたテンニエス研究のなかでは、「思惟を含む意志」と「意志を含む思惟」という本質意志と選択意志との基礎定義<sup>18</sup> から、意志を支える思惟という本質意志論の基礎理解がないがしろにされてきたという背景がある。意志を支える思惟と言っても、それは即座に意志を操る思惟と見なされ、本質意志と

<sup>16</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（下）』 p. 161 (G.u.G. S.189).

<sup>17</sup> 鈴木幸寿 「いま、なぜテンニエスか」 日本大学社会学科創設 70 周年記念号、『社会学論叢』 日本大学社会学会、1991 年、p.23。および、鈴木幸寿 「テンニエスとアメリカ社会学」『和洋女子大学紀要』 第四十一集、2002 年、p. 69-88 参照。

従来、テンニエスとウェーバーやジンメルとの関わり合いについては言及されることが多いが、鈴木は、ルーミス、リップマン、パーソンズ等の初期アメリカ社会学へのテンニエスの広汎な影響を紹介しながら、テンニエスをヴァイマル期における新カント派や歴史学派の哲学的論争の延長線上に位置づけている。また鈴木は、ニーチェの『悲劇の誕生』とテンニエスとの関連に注目し、テンニエスの本質意志論と、初期ニーチェの生の哲学—古代ギリシアにおける文化的、歴史的、芸術的・道徳的営みの統一性との影響関係に言及している。鈴木論文は日本におけるテンニエス論の理論的研究の停滞を指摘しているという点で極めて重要である。

また、テンニエスの類型論のなかでの行為の総合的評価は、パーソンズを参照。Talcott Parsons: *The structure of social action : a study in social theory with special reference to a group of recent European writers*” vol.2, New York: Free Press, 1968, pp.686-696.

<sup>18</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』 p. 164 (G.u.G. S.73).

知性との関係は、意志論研究の視界から外されてきたと考えられる<sup>19</sup>。その本質意志に関わる知性の奥行きが切り詰められた結果が、本質的知性への参照を欠いた行為論であり、また快苦を根拠とする生物学的な本能への本質的知性の還元であり<sup>20</sup>、果ては、本質的知性をいかなる説明をも寄せ付けない形而上学の実体とみなす従来のテンニェス像を生みだし続けてきたのだ。

しかしそうした理解とは逆さの方向で、知性の側から本質意志論の構成を読み解くことの重要性が、テンニェスにより示唆されてもいる。「人間の意志という概念は、(…)それに思惟(Denken)が参与している点」にあり、また「本質意志という概念を正確に把握するためには、(…)それに関する感情または体験をその主観的実在においてのみ理解しなければならない」<sup>21</sup> という発言において、知性との関わりのなかで本質意志論が解されるべきであることが明確にされているのだ。

本稿は、本質意志はそのうちに知性を含み、それゆえに知性は実在性を離れて活動することはないという本質意志論の基本的な枠組みが、記憶論としても再構成されうるものであると考える。従来、テンニェスの記憶論の構想に立脚する評価は無きに等しい。その表面的な理由には、記憶に関するテンニェスの言及が、本質意志の全体を構成する諸形式——適意、習慣、言語、記憶、道徳的に行い、芸術活動、祭祀といった諸行為——の叙述のなかに分散し、まとまりを欠いているとの見解もあるだろう。しかし仮にもこうした記憶に関する叙述のまとまりのなさが、テンニェスの叙述上の問題であるとしても、しかし本質意志論の構想のなかで、意志の形式の最高次の相をなし、共同態に永続性と統一性とをもたらす記憶は本来極めて重要な位置づけを与えられてしかるべきはずである。一般的にテンニェス研究の伝統のなかでは、記憶は、経験と模倣と

<sup>19</sup> テンニェスのゲマインシャフト論は、一方で選択的知性による存在の構築と操作の暴力性の批判に立脚するものであり、歴史文化的に形成された実体的意志を存在の生成の契機とみなすという意味で、従来、主意主義の流れに位置づけられてきた。しかしテンニェスが主題とするのは、様々な知性のはたらきのなかから、知性の恣意的な働きを区分することで見えてくる、知性と相互に協働する意志である。テンニェスの本質意志論から、知性と関連する意志という観点が欠落する解釈の状況は、ひとえにテンニェス研究のなかで限定的に生じたことではなく、一九世紀末の主意主義に対する偏った解釈傾向である。(鎌田康男 「主意主義」 『岩波哲学思想事典』、東京、岩波書店、1998年、p. 705 参照。)

<sup>20</sup> 「人間は苦痛を避け快楽を求めようとする。その意味で人間の意欲は、全て苦痛と快楽とに関連しており、しかもその関連自体は、全く非恣意的[un-willkürlich]・必然的である。」大淵英雄 「ゲマインシャフトとゲゼルシャフトにおける「諸関連」と「諸関係」とについて：F.テンニェスの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(文化哲学の定理)』を中心に」 『法学研究』(市川統洋助教授追悼論文集) 53-9、慶応義塾大学法学研究会、1980年、p. 186。

大淵は、ゲマインシャフトとゲゼルシャフトとの類型を、個別感覚的な快苦から導きだしている。この解釈は、人間の他に対する給付的肯定関係と敵対的否定関係との優劣傾向から集団の類型を定式化する方法によるものである。それは、本来、感覚(適意)のみならず、諸行為、ならびに知的形式により重層的に表現される意志論を、人間の低次な生物学的意志から引き出してくる、唯物論的思考にもとづくものである。

<sup>21</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』 pp. 165f (G.u.G. S.74).

により習得され、道徳的行為の判定のためにその都度呼び出される知識の貯蔵庫と見なされる。記憶論は、共同性の本質形成との関わりのなかで触れられることはなく<sup>22</sup>、観念連合の能力のもとで後天的に獲得される経験の形成というイギリス経験論的発想と、生得的に与えられる道徳性の経験表象への適用という二つの方向が分裂した形で解されている<sup>23</sup>。これに対し本稿では、テンニェスは記憶を共同存在の本質への通路と捉えている点から、記憶と本質意志との関係、すなわち記憶を媒介に形成される精神的ゲマインシャフトの構想の評価が課題となる。

## 2. 本質意志論に関する従来の解釈枠組み：行為の原因性としての意志の理解

ここでは、従来のテンニェス研究において意志論の定説とされている、行為の原因性に限定した本質意志の解釈が、本質意志論の全体構成を整合的に基礎づけるには不十分であることを示す。こうした従来の意志論解釈の図式は、選択的知性と、本質の聴取とに関わる知性との切り分けが不十分であるために起こるテキストの断片的誤読によるものである。この読み違いは精神のゲマインシャフトの普遍性が、精神的相における記憶論にその構成の枢要をゆだねていることを見過ごしてきたために生じる。その枢要とは、記憶がその形成と維持とに関わる実在性に本質意志が係留されるという観点にある。すなわちポリスの共生の記憶に相当する芸術活動、宗教と物語とに託される死者への崇敬<sup>24</sup>、理解されたことを分かち合う了解、それゆえ広い意味での知の歴史的文化的共有構造<sup>25</sup>などの、本質意志論に係留する出来事の一切は、記憶という知性に支えられているということである<sup>26</sup>。このことは、まさに精神のゲマインシャフトの全体像に関わる評価の問題に属している。

しかし記憶の視角から構成されるべきゲマインシャフトの全体像は、従来のテンニェス研究のなかでは重要視されることがなかった。ここに本稿は、従来の意志論解釈に読替の可能性があるということを表明したいと思う。また、記憶という知性の一環が本質意志論の全体構成に関わるという観点からゲマイン

<sup>22</sup> 吉田浩 『フェルディナンド・テンニェス：ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』 東京、東信堂、2003年、p. 76。

<sup>23</sup> Ferdinand Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie.* (1887) Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1979, SS. XVff( Vorrede zur ersten Auflage). 主著第一版の序文は、邦訳には収録されていない。しかし、第一版序文には、主著に散見される記憶論の二つの方向——イギリス経験論的発想と形而上学的発想——を統一的に解するテンニェスの記憶論の独自性が述べられている。その記憶と本質意志との関係については、第三節「本質意志論における行為と記憶」を参照されたい。

<sup>24</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (上)』 pp. 86f (G.u.G. SS.31ff).

<sup>25</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (下)』 p. 174 (G.u.G. SS.195f).

<sup>26</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (上)』 p. 180 (G.u.G. S.82).

シャフト像を読み替える道筋を辿ることにより、本来テンニェスが説くゲマインシャフトの現代的再現も、絵空事としてではなく、理論的な言及対象として議論の遡上に載せることが期待されうる。

1920年代ドイツでは、知性と対象との相互性のなかに意志の働きを認める現象学的方法がテンニェス研究に取り込まれる。社会の成員の内的な相互作用を意識の形成過程のなかで構成する試みをなしたフィアカント<sup>27</sup>、また現象学的社会学の成果を経由してテンニェス研究に踏み込んだワルター<sup>28</sup>等がこの系統に属する。これらの現象学的方法を取り込んだテンニェス研究は、意志論を主観性の側から辿られる知性との関係として再構成する試みであった。しかしこうした流れは、他の存在との相互性の契機を、意識の個別的な形成過程に見出そうとする心理主義的傾向が強いものという、すなわち歴史的内容への接続を欠いた局所的な議論であるとの否定的評価を受けることになる。さらにテンニェスのゲマインシャフト論は、ナチスの優性民族の思想、そしてマルクス主義的原始共産体制とのすり替えを経て、戦後のテンニェス研究のなかでは、そこに保守反動的、封建的、ロマン主義的というあられもないレッテルが貼られことになり、ついには意志と知性の相互関係というテンニェス研究に本来的な問題意識は跡形もなく流れ去ることになった<sup>29</sup>。

こうした流れを直接受け入れた日本のテンニェス研究では、スペンサーの社会進化論とジンメル形式社会学の調停を目指す社会学の総合を目論む高田保馬の『社会と国家』(1922年)や恒藤恭の『社会と意志』(1924年)に始まり、1954年に杉之原寿一による『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の邦訳に辿り着く。このテンニェス社会学の受容の流れのなかで、集中的に関心を集めたのは、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへの体制論的移行についてであり、純粋社会学の構想の内在的解釈という道ではなかった。杉之原を筆頭に、ほぼすべてのテンニェス研究では、本質意志も、選択意志も共に、「『行動の原因』または『行動への傾向性』」と理解され、それを掘り下げた解釈の展開は見られない。<sup>30</sup> そのような「ルーティン化されたテンニェス論」から抜け落ちているのは、テンニェスの純粋社会学の構想の中心であるべき意志論の視角において、彼の社会学の全体像を再構成する方法であった。<sup>31</sup> このテンニェス論のルーティン化は、「意志」が、行為(主体)との連関のなかで一義的に理解されることによるものである。こうした本質意志論の解釈枠組みは、いわゆる一般のテンニェス受容のなかで、行為論の視角からの意志論へのアプローチとして方法的

<sup>27</sup> Alfred Vierkandt: *Gesellschaftslehre*, (1928) New York: Arno Press, 1975.

<sup>28</sup> Gerda Walther: *Ein Beitrag zur Ontologie der sozialen Gemeinschaften*, 1923.

<sup>29</sup> 杉之原寿一 『テンニェス』 人と業績シリーズ9、東京、有斐閣、1959年、p. 52。

<sup>30</sup> *ibid.* p. 12.

<sup>31</sup> 鈴木幸寿 「いま、なぜテンニェスか」 『社会学論叢』、日本大学社会学科創設70周年記念号、日本大学社会学会、1991年、p. 24-40。



に定着した印象が強い。<sup>32</sup> さらにこうした解釈枠組みの固定化により、行為を引き起こす意志の主体が全体を支えるべきであるという、個人の自覚を契機として成立するゲマインシャフト像が捏造されることになる。それが逸脱したテンニェス解釈であるというのは、ゲマインシャフトとは、一なるものは全であり、全なるものは一であるという、個々の存在を超えた相において先駆けて在る全体性と、そこにつらなる個々の存在の相互関係に実現の契機があり、まさにそれが本質意志論に理論的拠り所を得ているからである<sup>33</sup>。また適意と習慣と記憶という意志形式、すなわち自然と人間と、そして世界としてこれらの交わりを映し出す記憶からなる意志の重層性は、個の行為への自覚という単純な視角から引き出されることはありえないからである。こうした影響は、ゲマインシャフトの現代的復活への期待が込められた友愛を、個人の主体的行為による実現に求めた飯田哲也の議論にまで及んでいると考えられる<sup>34</sup>。

以上のように、テンニェス研究の中で、意志論の基礎定義は、次第に行為の原因性としての意志の理解へと固定化されるようになる。たしかにこの意志の基礎定義は、近代特有の意志の理解に則していると考えられる。例えば、「汝の格率が普遍的な法則であるかのように行為せよ」は、カント哲学の実践的要請を端的に表す言葉であり<sup>35</sup>、そこで道徳的意志は行為の原因としての基礎づけを得ている。カントはそこに、行為の生成のプロセスがみずからの内にあるか、外から借用したものであるかという自己律法の準拠基準を付け加えるが、実践哲学での意志の基礎理解は、行為することと意志とを同一のものと見なす視点のもとに成立している。テンニェスによれば、こうした意志の理解のもとでの行為とは、「存在するものは実現だけ」<sup>36</sup> という意志の作用の一つの局面を前面に押し出すものである。そこには「過去を思い出し、与えられた刺戟にそそられ内面的連関に従ってかわるがわる浮かび上がってくる無数の表象感覚を思

<sup>32</sup> 「人間の意志は、もともと行動の原因または行動への傾向性としてとらえられ(…)る。」秋元律郎 『社会学事典』 東京、弘文堂、1994年、p. 823。

<sup>33</sup> 一なるものは全であり、全なるものは一と表現される実在性は、相互肯定的な意志関係において結合する人間関係(ゲマインシャフト)として示される。「人々の意志は、相互にさまざまな関係を結んでいる。(…)相互肯定の関係はいずれも、多における一、または一における多を表現している。」『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』p. 34 (G.u.G. S.3)。

また、自然法概念規定においても、実在性を全体と部分との相互関係のなかで見る視座が繰り返される。「本質意志の主体は、本質意志の形式と同様に、統一体(Einheit)である。すなわちそれは、統一体内部の統一体であり、諸々の統一体を内を含む統一体である。」『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(下)』p. 84 (G.u.G. S.147)。

<sup>34</sup> 「テンニェスの社会学的人間観にもとづく人間像とは、理論的にはみずからの意志によって他者と関係を取り結ぶ主体的・能動的な存在として人間像にほかならない」飯田哲也 『テンニェス研究：現代社会学の源流』 京都、ミネルヴァ書房、1991年、p. 233、および pp. 83f。

<sup>35</sup> イマヌエル・カント『道徳形而上学原論』 篠田英雄訳、東京、岩波書店<岩波文庫>、1998年、p. 85。

<sup>36</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(上)』pp. 213f (G.u.G. S.99)。

惟によって保持してゆく」<sup>37</sup>、そうした「人間の本質に属するいかなる実在」<sup>38</sup>からも遠いものとされる。ここでテンニェスの語調のなかに見え隠れするのは、その実現に向けて投入される行為の方向を先行的に規定する、普遍性という目的表象の設定の仕方である。テンニェスによれば、それは選択「意志の先在」<sup>39</sup>という、人為的に選び取られた決意の問題として、本質意志の多様なあらわれを経由して最後に出てくるものと見なされている。適意、習慣、記憶という意志の形式を経由する精神的ゲマインシャフトの形成過程からみれば、普遍性への意識は、本質意志と表象との相互関係、すなわち実在性の網の目の経験の過程の最後に自然に浮かび上がってくるものである。たとえば良心という徳に関わる意識は、記憶の網の目を経由するものとされる<sup>40</sup>。テンニェスにとっては、明晰判明さへと抽出されたカント的普遍性への志向も、知性において「目的と手段相互間の関係というような単純なカテゴリー」に選り分けられ、「習練と習熟」とを要するもの<sup>41</sup>、すなわちすでに存立する本質を前提として、本質意志の生成の後に付け加えられたものとみなされているのだ。

テンニェスは、こうした行為の原因性としての意志の解釈図式から引き出されてくる、規範倫理的、すなわち構築的な共同体論の形成を、全体との連関を逸した非実在的な行為と見る。それは自己の思い描く欲求の実現のほかに行動原理の基準をもたない選択意志的行為のあり方に重なる。ゲゼルシャフトの分析のなかでは、市場における経済的自己利益追求の行動を原理的に表明した選択意志の範型とされている<sup>42</sup>。さらに選択意志の範型は、現代の市民社会との直接的な問題として「世論」において言及されている。「世論」とは公共的思考である。それは、公共性の構築へ向かう思考の、「作成」と「加工」とを経由して最大公約数を相対的に調整する私的欲望と普遍の見解とのすり替えであり、「語る者や教える者と聴く者や理解する者との間の信用とか信頼とかいうよう

<sup>37</sup> *ibid.* p. 220 (G.u.G. S.102).

<sup>38</sup> *ibid.* p. 214 (G.u.G. S.99).

<sup>39</sup> *ibid.* p. 220 (G.u.G. SS.102f).

<sup>40</sup> *ibid.* pp. 222f (G.u.G. SS.101f).

<sup>41</sup> *ibid.* p. 219 (G.u.G. S.102).

<sup>42</sup> Ferdinand Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie.* (1887) Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1979, S. XVII (Vorrede zur ersten Auflage).

「ゲゼルシャフトという概念においては、人間相互間の原初的または自然的な関係はすべて抽象されなければならないから。ゲゼルシャフトの関係が可能ならしめられるためには、何かをすることができ、したがってまた何かを約束することのできる多くの裸の人々以外には、いかなる前提も要らない。したがって、一つの協約的な規則体系が行きわたっている全体ゲゼルシャフトは、その理念上無限のものであり、偶然に生ずる現実の限界をたえずつき破ってゆく。さて、ゲゼルシャフトにおいては、各人はすべて自己自身の利益を追求し、他人の利益は、それが自己自身の利益を促進しうるものであるかぎりにおいてのみ肯定されるのであるから、万人の万人に対する関係は、協約の生ずる以前やその外においては、(…)潜在的敵対あるいは潜在的戦争であると考えられる。」『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (上)』 p. 113 (G.u.G. S.45).

な一切の人間関係は「扱」されるまやかしの客観的実在性である<sup>43</sup>。廳は、この点をハーバマスにより示された、市民社会の成立根拠として模索される合理的知性による規範性と事実性との調停の問題へ関連づけている<sup>44</sup>。また主著第三篇「自然法の社会学的基礎」においては、すでに想起されている神聖な秩序の聴取と継承とにおいて成立する自然法と、集合的欲求の実現のために契約を志向する自然権との相違としても表現されてもいる<sup>45</sup>。

「思惟を含む意志」と「意志を含む思惟」という意志と知性との関係から行為をみるならば、行為は、知性の意志への関与の仕方に従属すると考えられる。すなわち行為は、知性が本質的性格を有するか、合理的性格を有するかに拘わらず、いずれも「知的」「精神的表現」を介在した意志の表現なのである。しかしながら、行為がゲゼルシャフトの相のもとにあるならば、選択的知性——契約——に駆動される意志のなかに、普遍性への契機が見出されることはない。選択的知性が発揮されるころには、普遍性の形成過程において経験される人間の営みの凝縮された重みは感じられることはなく、また人は各々の自己保存への欲求が肯定されるかぎりにおいての、妥協点としての合意を求める。そこでは、他者の存在と、他者の背後に堆積する歴史への尊重は無用のものであり、自己の利益に対してみずからの知力を駆動することがすべてであるのだ。そこにテンニェスは、誠実さや信頼という本質へと人を繋ぎ止める力はなんら存在しないという。<sup>46</sup>

このようにみると、従来のテンニェス研究を導いてきた「行為の原因性としての意志」という解釈枠においては、本質意志と選択意志との区別に関わる知性が一緒くたにされており、そして意志と行為との連関に介在する知性の奥行きの高さと豊かさから、本質意志と選択意志との相違にわたるまでの意志論の全体像が不当に低く見積もられていると考えられはしないだろうか。本稿はここに、行為と意志との関係への考察に加え、記憶という本質的知性を軸とした本質意志論の再構成を通して、意志と知性との相互関係までを照らし出す整合的なゲマインシャフト論が求められていると考える。

### 3. 本質意志論における行為と知性

前節「2. 本質意志論に関する従来の解釈枠組み：行為の原因性としての意志の理解」では、従来のテンニェス研究における意志論解釈を比較検討した。それにより、先行研究の解釈枠組みのなかでは、選択意志と本質意志との明瞭な

<sup>43</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（下）』 p. 187 (G.u.G. S.203).

<sup>44</sup> 廳茂 「思想史の中の（市民社会） — F・テンニェスにおける（市民社会）問題」 『社会学雑誌』 23号、2006年参照。

<sup>45</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（下）』 第三篇「自然法の社会学的基礎」を参照。

<sup>46</sup> *ibid.* p. 187 (G.u.G. S.203).

区分がなされていないことが示された。本節では、本質意志と選択意志との基礎定義、ならびに本質意志と記憶的知性との関係に着目することで、二つの意志の明確な区分の上に成立するテンニェスの意志論の基本構造の再構成を目指す。

さて、テンニェスの主著における意志の基礎定義とは、第一に、意志は、知性による対象の認知に伴う作用として知られるということである<sup>47</sup>。知性の対象とならないものは意志のあらわれとして知られないということである。すなわち、意志は、その表れを知覚との関わりのなかで、知覚されたものとして顕現する、ということである。この意志の第一の定義は、知性を含む本質意志と、知性に操作される選択意志とに共通する。

次に、本質意志論の構想には、意志の第一の定義に、時間性と意志との関係が付け加わる。この第二の定義によれば、本質意志は過去の相のなかに生じ、過去のものとして説明される<sup>48</sup>。本質意志は、いまここに、意志の対象が不在であったとしても、その不在を乗り越え、記憶により対象を再現するとされる。第一の定義から第二の定義への連続性を考察するならば、意志と知覚との相互関係のなかで意志が認知されるに至ることは、知覚という知性を經由するほかに意志の世界への顕現はない、ということであり、さらにはそうした知覚は、記憶の働きのおかげで、いまこのときにこの場所には不在の過去のものであっても、あたかもいまこのときこの場所にあるものとして不在の対象を呼び覚ましうるということである。

これら二つの定義のもとでは、知性と意志との相互性を支える相即不離の関係にあり、生のなかに展開される多様な行為(またそれらの行為に付随する個々の意志)は、一つの共通項——すなわち記憶という、知性と意志との交錯点を経て、記憶の網の目としての実在性のなかに引き入れられる。その実在性として我々の周囲に張り巡らされた記憶の網の目は、誰のものでもなく、なおかつ、誰のものでもある、そうした精神的ゲマインシャフトの普遍性を支える理論的根拠である。

従来のテンニェス研究のなかでは、第一の定義のみが取り上げられ、第一の定義と第二の定義との相互関係が言及されることはなかった。これまで考察してきたように、第一の定義と第二の定義とは、記憶の形成する実在性において結びつく。そこで、以下において、二つの意志の基礎定義から、テンニェスの意志論を再構成しつつ、また同時にそこに従来の意志論の理解を重ねてみたい。

テンニェスの意志論の基礎定義の第一のものは、知性的表象との関わりのなかで捉えられる。すなわち本質意志と選択意志との二つの意志の基礎定義に共通する、個体における意志の痕跡は、まず知覚としてあらわれるとされる。そ

<sup>47</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (上)』 pp.172f (G.u.G. SS.77f).

<sup>48</sup> *ibid.* p. 165 (G.u.G. S.73).

ここで知覚の対象を引き起こす一定の作用との結びつきのなかで、自己の存在表現としての意志が確認され、意志は知性に関わりを持つ対象として理解される。

「ある対象の印象（または観念）には、ある反作用の傾向（または観念）が自己の存在の表現として必然的に結びついている。意志は、これらの対象に関係するもの——すなわち、これらの対象の知覚に関係するもの、したがってこのような活動に関係するもの——として理解することができるとともに、内から外に向かう活動に関係するものと考えることができる。」<sup>49</sup>

またこの自己の存在表現としての意志が、行為としてあらわれ認知されることになる。ここまでの意志の基礎定義は、「表象に対応する対象を産出する能力」と捉える西欧哲学の基本的伝統に則していると考えられ、またそれゆえ従来のテンニェス研究が採用してきた行為の原因性としての意志の理解は、すぐれて近代の意志論解釈の伝統に従っていることになる。

次に、知覚に付随する作用に意志のあらわれを見る意志論の最初の定義に、ただ現在の相においてのみ読み込まれる知覚を通した意志の時間への関わりが捉えられる。それは次の一文に集約されている。

「本質意志は過去のなるものにもとづいており、生成しつつあるものと同様に、この過去のなるものから説明されなければならない。選択意志は、それが関連する未来的なものによってのみ理解される。」<sup>50</sup>

この箇所は、意志と知覚との関係から次のように統一的に理解されうる。それは意志が知覚との相互関係のなかで生じるかぎり、意志は過去に知覚の中で起こったことを、時間を遡及して操作することはできない。そのように考えるならば、過ぎ去った過去のなるものから生じ、その過去のなるものの相において説明されるとされる本質意志の領域のもとで語られる一切の行為は、過去の相におかれるのであるから、ここで意志との対応関係にある知覚は過去の出来事として理解されるべきである。

そうした本質意志と知覚との関係は、「過去を思い出し、与えられた刺戟にそそれ内面的連関に従ってかわるがわる浮かび上がってくる無数の表象感覚を思惟によって保持してゆく」<sup>51</sup> とされ、一つ一つの知覚が実在性の全体を構成する一つの部分として、「その性質と運動を規定する全実在との連関において」<sup>52</sup> 有機的に関連し合うことが示されている。このような、意志を現在の相に繋

<sup>49</sup> *ibid.* pp.172f (G.u.G. SS.77f).

<sup>50</sup> *ibid.* p. 165 (G.u.G. S.73).

<sup>51</sup> *ibid.* p. 220 (G.u.G. SS.102f).

<sup>52</sup> *ibid.* p.37 (G.u.G. S.4).

ぎ止める知覚は、現在の相においてのみ、そのあらわれが説明される。しかし知覚は、絶えず過ぎ去りゆくものであるがゆえに、「現在として感覚するものは、まず観察され、次に理解しようとする」<sup>53</sup> のであるから、知覚は現在の相にとどまることのないものとして知られる。月が出ている、松虫が鳴く、風がそよぐ、金木犀が香り立つ、といった個々の知覚は、いずれも今ここに留めおかれることのない、過ぎ去りし表象として知られる。しかし、そうした過ぎ去りし表象は、それらが校舎の裏庭での出来事という一つの全体のなかに繋ぎ止められることで、そこに連なる一つ一つの出来事として思い出される。テンニェスによれば、表象を通して認知される意志の一切は、過去の相において生じ、また過去の相において「ひとたび言語記号が存在するに至ると、他の観念同様にたえずこれらの言語記号を種々様々に結び合わせて再生してゆく」ことで、現在の相に引き上げられる、という<sup>54</sup>。まさにそれは記憶が実在性から呼び出され、また記憶を通して形成される実在性のことである。この有機的な実在性は、過去において、既に存立する実在性の無限の流れから、個体と外界との接面である知覚を通して汲み出されてくる本質意志のあらわれ（形而上学的分け前）である。それが知性を通してあらわれるかぎり、生き活きとした記憶として、私という存在を通して活動しつづける存在の網の目<sup>55</sup>である。

テンニェスは、このような実在性のなかに張り付いた知性を、「私の存在・私の実体の一回的ならざる永続的なエマナチオン」と表現する<sup>56</sup>。テンニェスは、主著の構想に先駆けて、歴史性と文化性という過去の相に刻み込まれた他に対

<sup>53</sup> Ferdinand Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie.* (1887) Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1979, S. XV (Vorrede zur ersten Auflage). 訳は筆者による。

<sup>54</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』 pp. 183f (G.u.G. S.83).

<sup>55</sup> *Thätigkeit ist die Veränderung des Organismus; sie hinterlässt irgendwelche Spuren, sei es in gleicher, in entgegengesetzter oder in indifferenter Richtung zu der Tendenz seines Wachstums und anderen Entwicklung, und dies ist, was als Gedächtniss verstanden wird, insbesondere sofern es die bleibende Arbeit und Kraft (denn Kraft ist nur vorräthige Arbeit) sinnlicher, d. i. schon in Gestalt von coordinirten Complexen, fertiger Empfindungen ist, welche doch selber erst durch Gedächtniss geleistet werden.* Ferdinand Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie.* (1887) Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1979, S. XIX (Vorrede zur ersten Auflage). 引用文中の強調は筆者による。

なお、網の目という表現は、テンニェスのターミノロジーのなかでは、有機体 (Organismus)、そしてその言い換えとしての複合体 (Complex) そのものであり、また有機体の全体像を構成する部分の集合体を指す。例えば、全体としての生と網の目 (das gesammte Leben und Weben など) といった表現が参考になる。ibid. p. 173 (G.u.G. S.78).

<sup>56</sup> 「外界の事物とわれわれとの距離の近さの度合いに従って、そして外界の事物がわれわれによって感ぜられ認められ、いわば絶えず生の流れから形而上学的分け前を受け取りつつ知性によって堅持されている度合いに応じて、この外界の事物そのものは、生き活きと活動するものとして私という存在を通して活動し働き続ける。それは、私の存在・私の実体の一回的ならざる永続的なエマナチオン (Emanation) であり、私の有機的な真の所有物である器官のごときのものである。私の創造物として働き働いているものすべてについても、すなわち私が生産し生んだもの、私が栽培育成し哺乳し保護したもの、最後にまた私が私の精神と技術とによって作り出し形づくったもの、これらすべてのものについても同様なことが言える。」 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（下）』 pp.20f (G.u.G. S.110).

する意志のあらわれを考察の対象とする文化哲学に関心を寄せていたことが知られている。<sup>57</sup> しかし主著のこの箇所においては意志に基礎づけられる他者との相互関係はさらに精確に言及されている。それは、現在の相において知覚として取り込まれる実在性の断片が、記憶をとおして過去の相の出来事へと媒介されることで、一切の出来事が過去の相に持ち込まれた語りの対象として再現されうるということである。こうして他の存在の意志との相互の関わりが、統一された知的共同性——記憶の共同性の裾野において、共に語り、共有することのできる対象となるといえる。

しかし、仮にここで、この第一の定義と選択意志の定義とを並べてみるならば、知覚を生み出す原因としての意志の理解（第一の定義）と、行為の実現に必要な目的を産出する意志の理解（選択意志の定義）との間に決定的な違いはなく、第一の定義だけを頼りに本質意志と選択意志との区別をつけることは極めて困難であることがわかる。両者は「表象に対応する対象を産出する」行為として読み取られうるのであり、そこに本質意志特有の特徴（第二の定義）が気づかれることはない。

選択意志とは、

「己の行う可能的な活動の（蓋然的または確実な）諸結果を想像して、基準として定立されている最後の成果の観念に照らしてそれらを比較測定し、その可能的な諸活動を選びわけて配列安排して、将来それらを実現せしめる」<sup>58</sup>

そのような存在構築的な意志のあり方である。選択意志は、過去の相において形成される実在性との関連を断ち切る知性により生みだされる恣意的な表象の実現を志向する。先のカント的意志論の基礎定義に立ち返るならば、表象に対応する対象を生み出すように「自分自身を規定する能力」<sup>59</sup> は、他者との関わりにおいて承認されるべき普遍共通性に根拠づけられるべきであるが、選択意志に付随する行為は、「その創造者—思惟の主体—との連関においてのみ」<sup>60</sup>、その根拠づけを有する<sup>61</sup>。選択意志は、未来の相における世界を意のままに構

<sup>57</sup> 鈴木幸寿 「いま、なぜテンニェスか」 日本大学社会科学創設 70 周年記念号、『社会学論叢』、日本大学社会科学会、1991 年、p24-40 参照。新明正道、『ゲマインシャフト』東京、恒星社厚生閣、1970 年、pp. 6f 参照。

<sup>58</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』 pp. 166f (G.u.G. S. 74).

<sup>59</sup> イマヌエル・カント『実践理性批判』 波多野精一、宮本和吉、篠田英雄訳、東京、岩波書店〈岩波文庫〉、1998 年、p. 41。

<sup>60</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』 p.165 (G.u.G. S.73).

<sup>61</sup> テンニェスにとっては、カントの実践理性としての意志ですら選択意志の系列に属する意志のあり方と見なされる。テンニェスによれば、格率の普遍的法則への一致に道徳の実現を求めるカントの主張には、普遍性へと至る認識の過程が抽象的に扱われているという。テンニェスは、そうした普遍性への認識を、記憶のなかで保持され、学ばれ、また習練されることからくみ出されてくるプロセスのなかに見ている。

築することに力の一切を集約するため、一つの行為が係留する他の様々な行為や出来事の連鎖のなかにおかれた可能性の総体を排除する傾向を有する。この選択意志的行為は、任意、比較考量、決意という行為の形式をとることにより、自己利益を主張する合理的知性のことである。<sup>62</sup> それは本質から離れた自己利益を追求する未来的思考であり、それにより過去は自己利益を追求する行為を妨げる障害として退けられるともいえる。きわめて単線的、攻撃的な質を有する行為である。このように見たとき、果たして、選択意志と本質意志との間に明瞭な区別はあるのだろうか。次に、従来、二つの意志がなぜ明瞭に区別されず、混同されてきたのかを示したい。

テンニェスは、本質意志と選択意志との双方に共通する意志の性質を、「行動の原因または行動への傾向性」<sup>63</sup>（意志の第一の定義）と捉える。本質意志論の枠内では、意志の第一の定義に叶うものとして、まず適意が挙げられている。生物としての人間は、新陳代謝、器官の発育、それらを脅かす不快な状態の排除、そして生殖による自己保存といった活動を営むなかで、「自己の生命を促進する活動や行為」を「生具的な快感」により肯定する<sup>64</sup>。この一連の生物学的な過程は、「力の感情」により「行動へと駆り立て」られ、快的な対象や「行為」の獲得へと至る「衝動であり意志」である<sup>65</sup>——これが生物としてみられた人間の適意である。また個体の自己保存が長い生のなかで安定するためには、対象獲得を常に可能にする器官が「能動的な意志」により鍛錬され、また維持される——それは適意の発展形態としての習慣を生物学的に表現した意志である。この適意の領域において語られているのは、対象を獲得するために駆動される意志である<sup>66</sup>。

他方、選択意志論の枠内での快とは、「生活を容易ならしめ、仕事を成功にもたらし、危険を貫いて人々を安全に導いてゆく」「幸福」であり<sup>67</sup>、幸福を獲得せんとする「意欲が強烈な願望」であるかぎり、その実現の可否の如何にかかわらず「未来の快樂」を指す<sup>68</sup>。そのような未来に夢想される幸福は、どのよ

「思惟は——いかに合理的・自明的なものであるように見えても——あらゆる精神活動のうちもっとも発達したものであって、殊にそれが有機的生命の衝動とは無関係に行われるためには、目的と手段相互間の関係というような単純なカテゴリーに適用される場合でさえも、多くの習練と習熟とが必要とされるのである。」 *ibid.* p. 219 (G.u.G. S.102).

<sup>62</sup> *ibid.* p. 202 (G.u.G. S.93).

<sup>63</sup> *ibid.* p. 164 (G.u.G. S.73).

<sup>64</sup> *ibid.* p. 173 (G.u.G. S.78).

<sup>65</sup> *ibid.* p. 179 (G.u.G. S.81).

<sup>66</sup> 従来の本質意志論の解釈図式のなかでは、適意として表現される生物的生命の自己保存の意志、すなわち快を肯定する感情は、自然へと近づくことで選択操作性を弱めた本質的知性で見なされてきた。

新明は、「思惟の介入度の少ない感情や衝動を中心とした精神的活動を」本質意志と考えている。新明正道 『ゲマインシャフト』 東京、恒星社厚生閣、1970年、p. 52。

<sup>67</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』 p. 206 (G.u.G. S.95).

<sup>68</sup> *ibid.* pp. 205f (G.u.G. SS.95f).



うにすれば幸福が叶うのかという願望に促され、その実現へと至る過程を、思考に媒介された「原因によって規定」し、自己の「意のままになるように思われる対象」を原因として規定する<sup>69</sup>。そのような選択意志も、「行動の原因または行動への傾向性」<sup>70</sup>を有する力である。このように、行為の原因としての意志の定義をテンニェスの意志論の唯一の規定とするならば、それにより本質意志と選択意志とが明瞭に区別されることはない。そればかりか、テンニェスの意志論の全体像は、選択意志意志論の枠組みに吸収されてしまい、本質意志を構成する記憶という視座から意志論の全体を統一的に見る契機が失われてしまう可能性が大きい。

テンニェスは、第二版序文において、ゲマインシャフト論を文化史的、経済的、社会的、倫理的、芸術的、そして法制史的に様々な学術史の流れのなかで考察する契機のひとつを、マルクスの「科学的社会主義」に対する違和感のなかに見出している。それはまさに、「経済的な『日常の』生活の、粗野な物質的な欲求や感覚や感情」といった生物的自然的唯物論的な唯一の変数（自己保存への意志）に、社会の原動力を求める思想である。<sup>71</sup> そうであるならば、まさに適意としての意志に意志論の全体像を基礎づけようとする従来のテンニェス研究の解釈図式は、テンニェスのから最も遠いところにあるのではないだろうか。

#### 4. 本質意志論における行為と記憶

これまで本稿では、実在性の概念と意志論の基礎定義を参照することで、テンニェスの本質意志論が、記憶論の視角から統一的に解釈されうるものであり、それによりゲマインシャフト論の全体は、記憶の共同性として読み替えることができるということが示された。また前節では、意志論を行為の原因性として解釈することが、本質意志と選択意志との区別の混同を引き起こすものであることを示した。そうした混同は、本質意志論を構成する適意、習慣、記憶という三つの形式が整合的に位置づけられていないということの証左でもある。

それでは、こうした適意、習慣、記憶といった活動は、本質意志論のなかにもどのように位置づけられるのだろうか。実在性の概念から検討するならば、本質意志とは、「生の統一性の原理」<sup>72</sup>としての全体と、その全体に繋ぎ止められた部分と部分との相互関係により織りなされる一つの有機的な連関である。光の当て方を変えて表現するならば、個々の諸部分が相互関係を保ち協調するかぎり、個々の存在の本質意志的活動は、各々が独立した発展史のなかに描か

<sup>69</sup> *ibid.* pp. 207f (G.u.G. S.96).

<sup>70</sup> *ibid.* p. 164 (G.u.G. S.73).

<sup>71</sup> *ibid.* p. 14 (G.u.G. S.XXX).

<sup>72</sup> *ibid.* p. 164 (G.u.G. S.73).

れるのではなく、個々の存在を含む全体の生長に代表された原型としての活動のなかに包括的に示されることになる。テンニェスによれば、そうした活動の原型が、「原始意志」と呼ばれ、個々の存在のなす活動は、この原始意志に従属するといわれる。それは、個々の存在にとっては「未知の永遠なるもの」である歴史的文化的環境の「協力援助」のもとで、同様の变化を遂げてきた「父母」の萌芽を有する「肉体の各発展段階」から出発し<sup>73</sup>、「知覚または映像感覚」を他の存在と共有せしめる記憶の「伝達」により繰り返される<sup>74</sup>、本質意志全体の永続的円環をなす。この活動の円環を表現するものが、本質意志の植物的意志のあらわれである適意と、動物的意志のあらわれである習慣と、ならびに精神的意志のあらわれである記憶である。しかしこうした本質意志の現れとしての三つの形式が統一された原始意志の活動であるといえるのは、第三の範疇としての記憶的意志が、本質意志を統一する契機——すなわち適意と習慣とを実在的な全体へと結びつける根拠を有するからである。それは普遍的な知性をめぐるイギリス経験論と大陸合理論との行き違いを調停するテンニェスの視点に導かれている。そこで記憶は、感覚の繰り返しにより形成される習慣を内化のプロセスと解する見方と、習慣の集積を普遍的な知性に媒介されたものと解する見方との交錯点に位置づけられる。そうした記憶論は、習慣と記憶とを裏表のものとしてみる見方である。記憶論の全体は、習慣としての本質意志が、個々の経験の内化のプロセスとして見られた記憶であり、またそのような習慣が記憶へと内化するプロセスは、普遍的な認識がその都度の姿を習慣のなかに痕跡づけ、そしてその痕跡を媒介として記憶の普遍性が保持されるという発想にもとづく。

このような記憶に関するテンニェスの発想は、主著の予備的考察として準備された文化哲学——その時々の歴史文化現象の根底に存在する意志の他に対する関係を説明する——の構想にもとづくものである。後に「純粹社会学」へと昇華する文化哲学への関心は、主著第一版の序文（1887年）には、まだ色濃く残っており、そこでは、記憶に関するテンニェスの基本的な枠組みが、普遍的な認識をめぐるヒュームの経験論とカントの合理論との調停にもとづき導き出されていることが示されている。それによれば、テンニェスの記憶論は、普遍性をめぐるヒュームの経験論とカントの合理論との調停のなかから生じてくると考えられる。

まずテンニェスは、その両者の対立を、一九世紀の歴史主義と合理主義との対立という問題系列のなかに位置づける。この対立は、ヒュームによる経験論とカントによる合理主義との対立に代表され、普遍的な認識への接近方法の相違として捉えられるという。テンニェスによれば、ヒュームとカントは共に、

<sup>73</sup> *ibid.* pp. 167ff (G.u.G. SS.74ff).

<sup>74</sup> *ibid.* p. 170 (G.u.G. S.76).

ヴォルフ学派の合理主義に見られる、普遍性の形而上学的表現に対する批判から出発したという点では共通している。<sup>75</sup>

一般的には、両者は、普遍的認識に関して、相反する方向を取ると考えられている。つまり、ヒュームの経験論では、普遍性は、感覚との関連のなかで、客観的質をもつもの——知性内在的な因果性からの接近が放棄される——として語られるのに対し、カント的合理主義では、自己参照的な知性もとの語りの対象であるかぎり、感覚や表象は、主観性の産物であり、それらの相互の結合に名前や判断、すなわち認識の道具を伴うという。また物自体の不可知論にも表明されていることだが、主観性の領域を形成する主観性それ自身を根拠として、普遍的な認識は知られないという立場をカントは採用する。それゆえカントは、普遍性への認識を、因果性により媒介された個々の認識の総体とみなす。<sup>76</sup>

しかしテンニェスの目には、カントとヒュームとの普遍性への異なる態度は、同じものに映っていた。カントの立場においては、普遍性へと近づく通路は、個々の存在に表現された力が因果性に媒介されたものと想定されるのだが、この方法は個々の存在における力のあらわれを経由して明らかにされるという意味で、普遍性を経験論的に構成するものであり、いわば普遍性を概念化することを断念する代わりに、そのあらわれとしての実在性から普遍性の可能性を模索する。テンニェスはこれをヒュームの採用した方法の裏返しと考える。ヒュームの議論のなかでは普遍的な認識については括弧に入れられるものの、個々の行為の繰り返しを経て形成され、習慣という実在的客観を構成するに至るとされる。テンニェスの目からみれば、このプロセスには、外側の客観性を主観の側へと取り込む役割を果たす、習慣というある種の主観と客観との接触面により内的に統合される意味が含まれている。いわば習慣は、外側の存在を知性のうちに取り込む合理主義的方法論に沿って考え出されている。<sup>77</sup> これらの二方向から構成される普遍的な認識が、記憶である<sup>78</sup>。そうであるならば、テンニェスの記憶論とは、個々の感覚の集積として痕跡づけられる習慣と、そうした習慣に先駆けてある「全体として内的な」<sup>79</sup> 記憶の相互性と解することも可能になる。このような調停こそ、記憶が、全体との調和として「直接的に表現された」「適意」から広がり、「形態的・象徴的に表現された」「慣習」を媒介として「再生」され<sup>80</sup>、「個人的な生命を超えて存続」<sup>81</sup> する「魂の根源的または

<sup>75</sup> Ferdinand Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie.* (1887) Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1979, S. XV (Vorrede zur ersten Auflage).

<sup>76</sup> *ibid.*, S.XV.

<sup>77</sup> *ibid.*, SS.XVf.

<sup>78</sup> *ibid.*, SS.XVIf.

<sup>79</sup> "der empfundene innere Gesamtzustand" *ibid.*, S.XVI.

<sup>80</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (下)』 p. 161 (G.u.G. S.89).

<sup>81</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト (上)』 p. 181 (G.u.G. S.82).

観念的な統一と調和」<sup>82</sup>をなす、個別性と全体性との相互関係というテンニエスの記憶論の独自性を切り開くものである。

またこのような記憶論という視角においてはじめて、本質意志のあらわれである、適意、習慣、記憶という三つの行為形式も統一的に解釈することが可能となる。それは、子の母に対する関係のように、「あらゆる対象や行為に対する人間の生具的な快感」に基礎づけられ、環境世界からの力の生理的な受容と排出とにより、「みずからにふさわしい力と形態の保存・蓄積・再生産」<sup>83</sup>とをなす適意と、そして「観念や衝動が定まった場所を獲得し故郷を得て」、一定の空間に「共同してたずさわり」、その空間に「適合順応し、それによってますますお互いに緊密に結びつくようになる」<sup>84</sup> 習慣とが、ばらばらの行為形式としてではなく、「個々の関係を肯定し、友好的行為や援助を義務化し、魂の根源的または観念的な統一と調和とをもたらす」祝祭や祭祀、物語、そして共同の芸術活動といった、記憶の共同的営みに貫かれた、ひとつの記憶の物語として捉えられるということである<sup>85</sup>。

## 5. 結論

以上により、本稿は、テンニエスの本質意志論が、「記憶」論として再構成されうるものであることを示した。この再構成は、次の三つの視角から構成されていた。第一に本稿は、テンニエスの語るゲマインシャフトが、竈や食卓、土地、自然、公共財、都市、芸術、祭祀宗教、記憶といった生の形式を共有する、人と人との実在的な関係の全体であり、そうしたゲマインシャフトを支える本質意志も、実在性の理念のなかで説明されるべきであるという問題意識から出発した。またそのような問いは、意志を行為の原因性として解する、従来のテンニエス研究で定説とされてきた意志論の解釈枠組みから、実在性の理念が構成されうるものであるか否かを検討するものでもあった。

この問いかけについて、第二に、本稿は、従来定説とされてきた意志論の解釈図式から、本質的な実在性は導き出されない、と答え、しかも従来の解釈図式の延長線上に、本質意志と選択意志とに関わる知性の区別が混同されるという新たな問題を呈示するに至った。その問題とは、個々の相互関係を本質的全体に繋ぎ止めることで人類の始原にまで遡ることのできる時間と空間と、またそのなかで交錯する無数の人と人との重層性により形成される、世界の複雑な生にを映し出す本質的知性と、そして対極的に、世界全体への関わり失い、目的実現のために環境世界を操作構築する選択的知性ととの間の混同であり、それ

<sup>82</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（下）』 p. 161 (G.u.G. S.89).

<sup>83</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（上）』 p. 171 (G.u.G. S.77).

<sup>84</sup> *ibid.* p. 180 (G.u.G. S.82).

<sup>85</sup> 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト（下）』 p. 161 (G.u.G. S.89).

は実在性と本質意志とゲマインシャフト論との相互を結ぶ一つの基本線——記憶——から知性を検討することがなかったために、生じた問題であった。この混同は、記憶が、個々の存在を超えた相において先駆けてある全体と、そこに連なる個々の存在の相互関係とを同時に実現する本質的知性であり、記憶としての意志論の地平のなかでのみ解消する。

「3. 本質意志論における行為と知性」において、テンニェスの本質意志論が記憶論として再構成されるための第三の論点として、記憶論として読み替えられたテンニェスの本質意志論は、ポスト近代特有の意志の問題に対して、独自の回答をもたらすものであることを挙げた。ポスト近代特有の意志の問題とは、一九世紀に顕在化する歴史主義と合理主義との間にある緊張関係のなかに提起された、普遍性に対する共通認識の問題として生まれてくる。それは、普遍性は主観的に構成されるのか、あるいは客観的に与えられるのか、という問題に関わるものであった。

テンニェスにとって、その問いは、普遍性を独断的な仕方では押しつける伝統的実体的意志論の素朴な受容を回避しつつも、恣意的な知性と意志とに構築され、一部の人間にしか通用しない普遍性に対しても警戒しなければならないという、二重の課題を含むものとして解消すべき問題であった。その一つの回答としてカントにより呈示された実践哲学の支柱である、表象に対応する対象を産出する能力としての意志の理解と、そこから生ずる普遍性も、テンニェスの目線に立てば、普遍的表象を軽々しく扱うものと見なさることになる——テンニェスにとっては、その普遍的表象こそ、人々が一つの同じ記憶という共同存在の知性的なあり方に関わることで形成され、また引き継ぎ、さらに足し加えられて表現される、あたかも記憶と忘却との永遠の繰り返しにより、一筋の滔々と流れる記憶の河である。過去の一つ一つの出来事が大きな全体としての記憶の一角を占めるという、記憶論としての本質意志論の解釈枠組みこそ、多様な文化と歴史とを背後に控える個々のゲマインシャフトが、譲ることのできない閉鎖性を互いに押し付け合う結果生みだされる相克を解消する理論的要請に耐えうるものである。本稿では紙面の都合上、割愛せざるを得ないが、こうしたテンニェスの問題意識は、従来の政治哲学、ならびに社会思想の領域では見過ごされてきた公共性と共同性との区分けにまで分け入るものであり、現代の公共性の構想を検討するフレームを提供するものである。

そのような視角に立てば、従来のテンニェス研究が与えてきた、保守的、ロマン的、形而上学的といった一切の評価は、見当違いも甚だしい偏見に過ぎない。それどころか、テンニェスは、我々の目線を超えて、近現代における共同性の崩壊過程の原因分析とその対応策の理論的可能性の遙か先を、そして我々を取りまくを記憶としての世界の遙か先にある源流をも見据えていたのだ。

【参考文献】

- Tönnies, Ferdinand: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Theorem der Kultur-philosophie, Soziologische Studium und Kritiken, Erste Sammlung, (1881)* Jena: Verlag Gustav Fischer, 1925.
- Tönnies, Ferdinand: *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie. (1887)* Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1979.
- Tönnies, Ferdinand: *Kritik der öffentlichen Meinung. (1922)* in: Ferdinand Tönnies *Gesamtausgabe, hg. v. Alexander Deichsel, Rolf Fechner und Rainer Waßner, 14 Bde., Berlin, New York: de Gruyter, 2002.*
- Tönnies, Ferdinand: *Die Sitte. Frankfurt am Main: Rütten & Loening, 1905 (Die Gesellschaft: Sammlung sozialpsychologischer Monographien; Bd. 25).*
- Kant, Immanuel: *Kritik der Urteilskraft. (1790=B)* Meiner Felix Verlag GmbH; Neuauflage, 2009.
- Kant, Immanuel: *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten. (1785)* Hamburg: Felix Meiner, 1999.
- Vierkandt, Alfred: *Gesellschaftslehre. (1928)* New York: Arno Press, 1975.
- Walther, Gerda: *Ein Beitrag zur Ontologie der sozialen Gemeinschaften: mit einem Anhang zur Phänomenologie der sozialen Gemeinschaften. Halle a.d.S.: M. Niemeyer, 1923.*
- Arendt, Hannah: *The Life of the Mind. (1978)* New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1981.
- Arendt, Hannah: *The Human Condition. (1958)* New York: the University of Chicago Press, 1998.
- Parsons, Talcott: *The structure of social action : a study in social theory with special reference to a group of recent European writers, vol.2, New York : Free Press, 1968, p.686-696.*
- フェルディナント・テンニエス 『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト：純粋社会学の基本概念（上・下）』 杉之原寿一訳、東京、岩波書店、1979年。
- イマヌエル・カント 『実践理性批判』 波多野精一、宮本和吉、篠田英雄訳、東京、岩波書店<岩波文庫>、1998年。
- イマヌエル・カント 『道徳形而上学原論』 篠田英雄訳、東京、岩波書店<岩波文庫>、1998年。
- アウグスティヌス 『三位一体論』 中澤宣夫訳、東京、東京大学出版会、1975年。
- ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲル 『精神現象学』 長谷川宏訳、東京、作品者、1998年。
- ハンナ・アレント 『精神の生活（下）』 佐藤和夫訳、東京、岩波書店、2003年。
- ハンナ・アレント 『人間の条件』 志水速雄、東京、筑摩書房<ちくま学芸文庫>、2000年。
- タルコット・パーソンズ 『社会的行為の構造』 稲上毅ほか共訳、東京、木鐸社、1989年。
- 西村克彦 「テンニエス著『しきたり』(Die Sitte)」 青山法学論集 24 (3)、青山学院大学、1982年、p. 57-90。
- 西村克彦 「テンニエス著『しきたり』(Die Sitte) (2)」 青山法学論集 24 (4)、青山学院大学、1983年、p. 97-127。
- 磯辺俊彦、井上毅 「テンニエス：所有について(1)」 『農村研究』 87号、東京農業大学

農業経済学会、1998年、p.116-122。

磯辺俊彦、井上毅 「テンニース：所有について(2)」 『農村研究』88号、東京農業大学  
農業経済学会、1999年、p116-121。

新明正道 『ゲマインシャフト』東京、恒星社厚生閣、1970年。

杉之原寿一 『テンニエス』人と業績シリーズ9、東京、有斐閣、1959年。

廳茂 「思想史の中の(市民社会) — F・テンニースにおける(市民社会)問題」 『社会学雑誌』23号(特集 学術振興会人文・社会科学振興プロジェクト 多元的共生社会の  
構築 — 被災地の現場から — 特集3 ふたたび市民社会を考える)、神戸大学社会学  
研究会、2006年、p. 111-149。

鈴木幸寿 「いま、なぜテンニエスか」 『社会学論叢』日本大学社会学科創設70周年  
記念号、日本大学社会学会、1991年、p. 24-40。

大淵英雄 「ゲマインシャフトとゲゼルシャフトとにおける「諸関連」と「諸関係」とに  
ついて：F.テンニースの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト(文化哲学の定理)』を  
中心に」 『法学研究』(市川統洋助教授追悼論文集)53-9、慶応義塾大学法学研究  
会、1980年。

石瀬秀治 「テンニースの社会本質論」 『富大経済論集』4-2、富山大学経済学部、1959  
年、p. 189-205。

飯田哲也 『テンニース研究：現代社会学の源流』京都、ミネルヴァ書房、1991年。

吉田浩 『フェルディナント・テンニエス：ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』東京、  
東信堂、2003年。

三溝信 『社会学的思考とは何か』東京、有信堂高文社、1998年。

鎌田康男 「主意主義」 『岩波哲学思想事典』廣松渉他編、東京、岩波書店、1998年、  
p. 705。

秋元律郎 『社会学事典』見田宗介他編、東京、弘文堂、1988年、p. 823。

# Memory and Naturalwill in Tönnies' theory of Community

**Masanori NISHIZAWA**

**Graduate School of Policy Studies  
Kwansei Gakuin University**

**Abstract:**

This thesis focuses on the relationship between memory and Natural will in the theory of Community, which was written by Ferdinand Tönnies as his main work *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie* (1887). The purpose of this study is to demonstrate theoretically the possibility, in which Natural Will could be reorganized as a sort of intellectual Memory, that is close resemble to transcendental philosophies, being quite contrary to the tradition of Tönnies' studies so far. In the tradition of Tönnies' studies which was handed out especially after 1920s, Will has been commonly understood as a cause of action, without any fundamental distinction of Natural Will or Rational Will. Therefore it has been concluded so far that Memory is a kind of a driving power and its storage in relation to, or in terms of Will, so that Memory has been evaluated in a sphere of Rational Will, the component of the cause of action. The careful referring to Reality in his terminology, however, shows that Memory represents Reality itself, that could bring as ideal an separated to the common sense, and so that it lets a human beings as a mortal in an intergenerational joint feel, find, and live. From Tönnies' viewpoint of Memory as Reality could we find a reference point, which serves the idea of mediation among discords happening as a culturally or historically. Thus in the same context, Tönnies' theory could also serve the alternative idea for publicness.

**Key words and phrases:** Community (Gemeinschaft), Society (Gesellschaft), Natural Will (Wesenwille), Rational Will (Kürwille), Memory (Gedächtnis), Reality (Realität), Understanding (Verständnis)